

## 学校経営推進費評価報告書（最終）

### 1. 事業計画の概要

|               |  |
|---------------|--|
| <b>学校名</b>    | 大阪府立大正高等学校 全日制普通科総合選択制   |
| <b>取り組む課題</b> | 生徒の学力の充実   |
| <b>評価指標</b>   | ¥ プロジェクターを活用したアクティブ・ラーニング型授業を継続的に実施できる教員の養成と増加<br>¥ 「学校教育自己診断」における生徒の授業に対する評価の向上<br>¥ 民間外部テストでの成績向上、進路未定者割合と退学者割合の前年度比減少 |
| <b>計画名</b>    | Cutting edge! TAISHO Project!!<br>プロジェクター活用の組織的アクティブ・ラーニング型授業で、変わる生徒、変わる学校、変わる大阪   |

### 2. 事業目標及び本年度の取組み

|                          |  |
|--------------------------|--|
| <b>学校経営計画の<br/>中期的目標</b> | 1 加速度的に変化する社会の中で対応できる「資質・能力」の育成<br>(1) 次期学習指導要領改訂を踏まえ「育成すべき資質・能力」を伸張させるための授業改善に取り組む。<br>ア アクティブ・ラーニングの視点に立った深い学び・対話的な学び・主体的な学びを実現するための授業改善をすすめる。<br>イ 「アクティブ・ラーニング研究チーム」を中心に授業改革につながる研究・実践をすすめ、評価方法の研究も含め授業改革の進展を図る。   |
| <b>事業目標</b>              | ① 生徒の主体的学習時間を確保し、双方向の授業を実施・研究。プロジェクターを活用したアクティブ・ラーニング型授業を継続的かつ多様な教科で実施することで生徒の満足度を向上させる。そのために、教諭のプロジェクターの使用率を3年後に100%にする。<br>② ベネッセコーポレーションの「基礎力診断テスト」を用いて、学力の定着度を分析し、指導・改善していく。<br>③ 授業改革により、進路未定者や退学者の割合を減少させ、市民社会の一員としての自覚を持ち、意欲的に役割を果たそうとする姿勢を持った人材を輩出する。<br>④ 上記、①～③を全校的、組織的に実施し、3年後にAL型授業の組織的实施におけるトップランナーとなる。 |
| <b>整備した<br/>設備・物品</b>    | 壁付け短焦点プロジェクター（20台）   |
| <b>取組みの<br/>主担・実施者</b>   | 主担：AL研究チーム実施者：全教員  |
| <b>本年度の<br/>取組内容</b>     | ① 自主学習会の実施<br>② 関西大学黒上晴夫教授による学校評議員としてのアドバイス（適宜）<br>③ 公開授業週間で授業の公開、研修<br>④ 「基礎力診断テスト」の実施、分析   |

|                          |   |
|--------------------------|---|
| <p>成果の検証方法<br/>と評価指標</p> | <p>① AL 研究チームメンバー25 名以上。研究結果の分析、公表。<br/> ② 教員アンケートでの AL 定期的実施率 100%以上。<br/> ③ 学校教育自己診断の満足度の前年度比向上<br/> 「わかりやすい」83%→85%、「工夫している」83%→85%、「考え、発表する」80%→85%<br/> ④ 「基礎力診断テスト」での成績向上者（C ゾーン者）の前年度比 10%増加。<br/> ⑤ 進路未定者 5 %以下、退学者 10 名以下。</p>   |
| <p>自己評価</p>              | <p>① 再編整備にともなう教員数の減少により、昨年度 AL 研究チームは解散。授業改善チームが校内での自主学習会を 2 回実施。外部からの学校見学の受け入れも行った。… (△)<br/> ② 教員アンケートでの AL 型授業の定期的実施率は 56.3%であった。(目標は 100%)<br/> …………… (△)<br/> ・ AL 授業…「毎時間実施」21.9%、「よく実施した」34.4%、「数回実施」37.5%、「未実施」6.2%<br/> (アンケートの質問項目変更により前年度との比較ができない)<br/> ・ プロジェクター使用率…「毎時間使用」34.4%、「よく使った」31.3%、「数回使用」18.8%、「未使用」15.5%<br/> (プロジェクター使用率の前年度比+12.1%)<br/> ③ 学校教育自己診断で授業の満足度は、目標値には達していないが増加しており、生徒の活動も行われている。…………… (○)<br/> ・ 「わかりやすい」76.4%→80.5% (前年度比+3.9%)<br/> ・ 「工夫している」74.7%→82.1% (前年度比+7.4%)<br/> ・ 「考え、発表する」60.5%→71.3 (前年度比+10.8%)<br/> ④ 「基礎力診断テスト」での成績向上者（C ゾーン以上の生徒数）6.1% (前年度比-4.3%)<br/> …………… (△)<br/> ⑤ 進路未定者 22 名 (11.8%) (前年度比-2.3%) しかし、目標値には届かず…………… (△)<br/> ・ 退学者数 (3 年 1 名、2 年 5 名) (前年度 28 名) …………… (◎)</p>  |
| <p>事業のまとめ</p>            | <p>z プロジェクターの使用率は 84.5%であり、教材を視覚的に活用する授業が多く展開されている。ただし、プロジェクターを活用した AL 型授業の定期実施 100%には至らなかった。その主たる要因は、AL 研究チームの解散にある。再編整備の影響により AL 研究チームがなくなったことで、AL 型授業の浸透に向けた校内の「空気」が変容してしまった。また、チームでの取組みがなくなったことで、個人的な取組が主となり、教員個々の意欲やスキルに左右されてしまった。来年度は設置されたプロジェクターの 3 分の 2 は大正白陵高校に移設され、閉校まであと 1 年という状況で課題を改善するのは難しい。ただし、残された教員間で授業改善に向けての機運を高めるためには、組織の再結成が必要であると考えられる。<br/> z プロジェクターの使用率の上昇とともに、生徒の授業の満足度は上昇している。しかし、それが外部テストによる客観的な成績の向上にはつながらなかった。これは、授業の目的として「何ができるようになったか」が明確ではなく、外部テストの成績向上とはマッチしていなかったことが要因であると考えられる。学校全体として、「何ができるようになったか」を共有し、その達成に尽力する必要がある。<br/> z 進路未定者や退学者について、減少傾向にはある。これを加速するには、授業だけでなく、学校の教育活動全般を通じての支援が必要である。特に、家庭環境の厳しい生徒が多数入学している現状で、家庭や外部機関との連携なくしては、進路未定者や退学者の減少は達成できない。授業改善という観点から、この課題に取り組むためには、進路未定者や退学者がどのような授業を望んでいたのか、何につまずいていたのかなどの分析が必要であると考えられる。</p> |